

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652135

研究課題名(和文)ディオニュソスを中心としたギリシア・ローマ画像のアジアへの伝播・吸引の研究

研究課題名(英文) Diffusion of Western Civilization and Drawing Force of Eastern Civilization ~ Transmission of Greek and Roman mythological iconography towards East

研究代表者

芳賀 満 (HAGA, Mitsuru)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授

研究者番号：40218384

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)： 東方に伝播したギリシア・ローマ画像のデータベース作成から、伝播には2つのタイプがあることが明瞭となった。

ひとつは伝播過程における「劣化コピー」で、ギリシア・ローマ神話の内容が十分に伝わらず画像には理解不能部分が多い。従来はこれに基づき西の「伝播力」が強調され、東は西を甘受したとする「西高東低」との認識が主であった。

しかし2つめとして神話内容を十全に理解した上で東方で画像化されたと認識すべき、ディオニュソス、スキュラ、テュケ、ヘラクレス等の事例があることを指摘した。東の「吸引力」を認め、その最も強力な「磁場」が仏教であり、つまりギリシア文明の視座で仏教美術を見直すべきであることを示した。

研究成果の概要(英文)： In the transmission of iconography of Greek mythology towards the East, in cases such as Tyche, Dionysus and others, Buddhism played an important role just like a strong "magnetic force". As a result, one can say that Mediterranean Civilization is not to be found only in the Mediterranean region but also in the Buddhist context in Central Asia.

But it was not just a unilateral flow of ideas from West to East. Understanding well the functions and attributes of Greek Gods and Goddesses, the East exclusively and selectively absorbed elements of Western Civilization to adapt them into Eastern Cosmology and therefore forming an even richer Eastern Civilization.

It has been mentioned often that Greek or Western iconography had the power to diffuse into the East. The author would add to this that the Eastern Civilization had the power and ability to draw aspects of the Western Civilization into their own.

研究分野：考古学

キーワード：ギリシア・ローマ美術 仏教美術 ガンダーラ 東西文化交流 デイオニユソス スキュラ テュケ - 出家踰城

1. 研究開始当初の背景

ギリシア・ローマ文明の世界史における重要性についてはあらためて述べるまでもない。

経時的にみて、中世、ルネッサンスから現代に至るまでの後代への影響は多大であり、よって西洋の根源として現代世界の重要な基盤である。

しかし共時的(そこには数世紀の「時差」が存在するが)にみた場合も、ギリシア・ローマ文明はギリシア・ローマあるいは地中海域という地理的範囲の内側のみに関わるものではなく、広くユーラシア大陸に、少なくとも中央アジアやインドにまでは明確に広がっていることも確認されなくてははいけない。

特にそれは、通常の言語を超える普遍性を有しゆえに伝播力を有する「造形言語」、つまり美術作品において顕著である。ギリシア・ローマ神話の図像であるギリシア・ローマの神々や英雄や怪獣や人物の図像が表された美術品が、現在のシリアやイラク、イラン等からは勿論であるが、さらにアフガニスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、パキスタンなどの中央アジアからインドに至るまでの範囲で見つかっている。またこれらの美術品の多くは動産であるが、ギリシア系都市という不動産もアフガニスタンなどで発見されている。

勿論、東方におけるこれら西方の図像の存在は既に知られている。特にガンダーラ仏教美術にギリシア・ローマ美術が影響を与えていることは既に多々指摘されているところである。

しかし、ギリシア・ローマ美術が東方に伝播した西から東へ向いたベクトルを強調する、西方からの観点に依拠した研究がこれまでは主であった。同時に、中央アジアやインドの仏教美術などを専門とする研究者達は当然東方に視座をおいているものの、西方のギリシア・ローマ文明までをその視野に入れることはない。

そこで、東方に伝播したギリシア・ローマの図像に関して、東西の両方に視座をおき、総括的に研究することとした。

2. 研究の目的

西にのみ視座を置いた伝播(diffusion)の研究は、一方通行の「文化伝達」の研究ではない。

西と東の双方に視座を置くことにより初めて、双方向の「文化交流」に関わる研究が可能なのである。

以上の考え方のもとに、ギリシア・ローマの神話を踏まえ、同時に東方での最も重要な「物語」としての仏教経典をも踏まえ、「紀元前4世紀頃から紀元後4世紀頃にかけての古代ユーラシア大陸における東西の文化交流の様相」を明らかにすることを研究の目的とした。

3. 研究の方法

東西間の文化交流を研究するにあたって、ギリシア・ローマ神話と仏教経典などといった文献資料を踏まえながらも、特に美術作品に基づいて研究する方法をとる。

上述のように、図像や美術作品とは造形という言語であり、それは人間の人体が基本的に同じであり(よって身体反応と身体言語が共通する)、その人間が地球上に住んでいる(よって太陽、月、山河、風、水など基本的に同じ自然圏を共有する)以上は、通常の言語を超える普遍性を有し、ゆえに強力な伝播力を有するのである。

同時に一般に、図像や美術作品とは「視覚的哲学」に他ならない。したがって、この場合は、「ギリシア・ローマ神話という哲学」、「仏教という哲学」を視覚的に表現したものが、それぞれ「ギリシア・ローマ図像・美術」、「仏教図像・美術」なのであり、それらを図像学的に読み解き解釈すれば、その根底にある「哲学」が明らかになる筈である。

その「哲学」の媒体は通常の言語ではなく造形言語であるので、ユーラシア大陸の諸言語・諸文明の垣根を楽々と越える。同時にそれは美術作品であっても、あくまで「哲学」であるので、そこに歴史学者は「哲学」を見つけないといけない。

その解釈に説得力を持たせるためには、勿論、言語を媒体とする哲学、つまりギリシア神話と仏教経典という文字史料をも援用する。また解釈の根拠とする東方の美術作品は、悉皆調査の上、網羅的でなければならない。

悉皆調査を行った結果であっても、それはかつて存在していた全ての美術作品のごく一部でしかないが、その現存の部分集合が過去の全体集合の特質を反映しているサンプルであるとの大前提の上で、考古学の研究は進められるのである。

また、東方世界の過酷な自然環境、近現代における政治体制と国家体制やさらには現在の豊かではない経済状況などを反映して、東における美術作品研究データの事例数とその質は、西のそれよりも劣る。つまり西、つまりギリシアやイタリア半島などのヨーロッパを中心とした地中海域では、政治体制・経済状況が比較的安定しており、ゆえに学術的発掘に依拠した研究状況と出版状況が優れており、蓄積された先行研究の成果という「ドット」は多く、且つその多くは学術的発掘に拠るのでデータが密であり、したがってより詳細な「絵柄」をそこにみいだすことができる。しかし東の「ドット」は数が少なく、しかもその多くが盗掘などに拠るので粗である。そこに意味ある「絵柄」を見いだすには細心の注意と共に「腕力」も必要となるのである。同様に、古代の文献資料から得ることが出来るデータに関して、西は密で、東は粗い。

研究方法に関わる以上のような研究対象

の状況を踏まえた上で、より具体的には、既に東方において事例がよく知られているディオニュソスを中心としたギリシア・ローマ神話図像の網羅的データベースを作成して、そこから研究を始めた。

その際には「研究の目的」の冒頭でも述べたように、西にのみ視座を置いた伝播(diffusion)の研究、一方通行の「文化伝達」の研究ではなく、東にも視座を置くこととした。つまり、西の図像の伝播に関して、西に「伝播力」があるならば、東には「吸引力」があると認識すべきではないかとの仮説をたてたのである。それゆえに研究課題名を、「ギリシア・ローマ図像のアジアへの伝播・吸引の研究」としたのである。

双方向の「文化交流」に関わる研究によって初めて、ギリシア・ローマ文明と東の文明(特に仏教文化)に関わる新たな認識を得ることができるのである。

4. 研究成果

(1) 2つのタイプ～「伝言ゲームタイプ」と「摂取・吸引タイプ」

研究初年度と2年度に、東に伝播したギリシア・ローマ神話図像に関わるデータベースを作成した。その結果、伝播に関わり、2つのタイプがあることを認めるべきことが判明した。

1つめのタイプは、「伝言ゲームタイプ」とも言うべきもので、図像伝播過程における謂わば「伝言ゲームによる劣化コピー」である。ギリシア・ローマの図像が伝播しても、その神話の内容が十分に伝播しなかったために、図像も不十分にしか理解されずに「図像として劣化」して、その結果、東で製作された図像には意味不明の破綻部分が多くなる現象である。ギリシア・ローマの図像の東への伝播に関わる従来の研究では、このタイプに従った東の図像の理解が主であった。そして、西の「伝播力」が強調され、東は西をただ甘受し受容したと認識し、西と東の両文明を「西高東低」の関係と認識する視座である。

しかし当初の仮説通りに、研究2年度から最終年度にかけて、2つめのタイプとして、明らかにギリシア・ローマの神話の内容や、神・英雄などの当時のギリシア・ヘレニズム世界における属性を、十二分に理解した上で、東において図像が摂取・吸引されたと認識すべき事例が多々あることが判明した。従来は漫然と、単なる「受容」の事例とされていたものも、実は東が理解し選択した上で積極的に摂取・吸引したと考えるべき事例が多々あるのである。「摂取・吸引タイプ」とも言うべきものである。

例えば、ガンダーラ仏教美術などにおけるディオニュソス、スキュラ、テュケー、ヘラクレスなどの神話上の神や英雄や怪獣・海獣などの図像である。あるいは新疆ウイグルの

仏教石窟にまで到達したアカンサスの葉の文様である。例えば、半神・半人の仲保的な存在としてのヘラクレスの属性を十全に理解した上で、ティリヤテパ出土の私鑄銭において、この英雄の姿を借りて、現存最古の仏像表現がなされたのである。

(2) 東の「吸引力」

「摂取・吸引タイプ」の発見あるいは認識により、東西の関係は必ずしも「西高東低」ではなく、両者の間にあった関係はあくまで「東西交流」であり、西の「伝播力」と共に東の「吸引力」の存在を認めるべきことが判明した。東の文明の力をあらためて高く評価すべきなのである。

そしてその吸引の最も強力な「磁場」として仏教と仏教美術を認識すべきであることが判明した。それは同時に、ギリシア文明、特にギリシア・ヘレニズム時代の視座から、仏教と仏教美術を解釈し理解する必要があることをも意味した。

また、文献資料を援用しながらも、主に美術作品に依拠した本研究のもうひとつの成果として以下がある。

仏教の在家あるいは一般信者の観点からの研究の必要性の再認識である。従来の仏教あるいは仏教美術の研究は、主に仏教経典に依拠したものであった。つまりそれは、出家した僧、経典を読解でき理解していることを前提とできる者の視座からの研究であった。しかし、在家、あるいは仏教経典を読むことは出来ず、しかし図像による物語を理解できる者、あるいはそういった仏伝図を絵解きして解説してもらって理解する者、こういった者達の視座からも仏教美術は解釈されなければならないのである。

以上のようなことは、特に海獣スキュラと女神テュケーの場合に明瞭であったので、以下に「摂取・吸引タイプ」の具体的事例として示す。

(3) 「摂取・吸引タイプ」の具体的事例

～海獣スキュラ

現パキスタンのシルカップの民家跡などからは、ギリシア神話の図像が表された多くの石製円形小皿が出土しており、それらは在家の仏教徒の祭具である可能性が高い。地中海文明圏ではない東方の、あるいは仏教のコンテキストの中で、スキュラを含むこれらのギリシア神話図像はどのような機能を有していたのだろうか。

それらの図像の主題は、「スキュラ」、「エウローパの略奪」(牡牛に化けたゼウスがエウローパを背に乗せ海を渡り西方のクレタ島に行く)、「ガニユメデスの略奪」(大鷲に化けたゼウスが美少年ガニユメデスを天上にさらう)、「海獣ケートスに乗る海の乙女ネレイド」、「饗宴図」などである。これらはどれも人を天や渡海し対岸に運ぶ図像、天での再生復活と享楽を表した図像である。

これらの石製円形小皿は、仏像が出現したクシャン朝時代には殆ど作られなくなったことを考え合わせると、仏像がまだ無い時代の、ギリシア神話を領会しているギリシア系在家信者の仏教徒が、魂を彼岸にまで護送してもらい復活再生するという極楽往生の思いをこれらの図像に託した可能性が高い。従来の仏教美術研究は經典に依拠して出家者・僧・寺院を多く対象として想定してきたが、在家の仏教徒で、且つギリシア文明を受け継ぎそれに馴染んだ「ギリシア人」をも考慮しないとイケない。特に仏像出現以前の時代においてはそれが必要である。

つまり、従来は在家者の観点からの解釈が欠けていた。しかし大乘仏教は部派仏教と利他行において区別されるのであり、大乘仏教の隆起を待つまでもなく、在家の凡夫は原始仏教の時代からいた。

仏教初期の小乗系涅槃經典によると、如来滅後の遺骸の処置に関する阿難の質問に対して釈尊は、出家者には舍利供養に関わることを禁じ解脱への精進をせよと命じるが、在家者には如来の舍利を処理し、四つ辻に舍利塔を建て、それを礼拝すれば、長く福利と安楽があり心が清らかになり、死後に善きところ天に生まれるだろう(生獲福利、死得生天)と説く。解脱を求めて精進すべき出家者には現世的欲望は禁ぜられるが、在家者には来世の福利・安楽や生天といった土俗信仰的な果報を死後に期待してよいと釈尊自身が認めるのである。在家者の仏教は極めて世俗的傾向が強く、解脱を目的とするのなら本来必要ない「生天思想」が認められるのである。このような布施と供養を通じて善き果報を期待する世俗的な信仰形態は、ギリシアの神々の信仰と極めて親和性が良く、それが上述のようなギリシアの図像が吸収される素地となったのではないだろうか。

但し、ギリシア・ローマでは偶像はそれ自体が神であった。それゆえに人格神の偶像に生気を与えるべく、伝説の彫刻家ダイダロスに代表されるギリシアの彫刻家達は息吹の表現として「アルカイック・スマイル」を考案し、実際に視力を有し話し歩く彫像を求めてコントラポストが発達してゆく。一方本来インド世界では、現象世界から完全に離脱したところに絶対非人格で属性や相を持たない真理は存し、偶像あるいは人格神はあくまで心弱き人間が形なき真理に到るための段階的な手がかり・よすがでしかなかった。

しかし仏教の在家信者の観点から考えると、だからこそより強く造形に縋るのである。その点でギリシア・ローマ世界とインド世界の宗教はどちらも現世利益の志向が強く、互いの親和性が高い。

するとギリシア系の人間が在家の仏教徒になった場合、彼らにとって伝統的な、そして仏像がない時代には特に、ギリシアの神々の姿がそのよすがとなり、福利・安楽、生天の願いを込めてギリシアの図像が援用され

るのである。ちょうど後のクシャン朝の人々にとって馴染み深い存在であったクシャン朝の守護神ナナ女神がラニガト出土坐仏台座酒宴図で坐仏の真下に現され死者の魂を導くよすがとなったように、あるいはイラン系の神ミスラ(日神)とマオ(月神)が「カニシカ舍利容器」に坐仏と共に表され故人の霊を守護するように、ギリシア神話の図像が仏教のコンテキストにある場合は、それにギリシア系在家仏教徒が生天の願い託し、ギリシアの神は死者の魂を導くプシュコポンポス(魂の先導者)の役を果たした可能性がある。ゆえに、アフガニスタンのスキュラは翼を持つのである。スキュラの翼はギリシア本土で生え、イタリア半島で盛んに造形され、フェニキアの墓からの事例もあるが、仏教の地では極楽往生に導くための翼となったのである。解脱、涅槃、そして楽園への再生復活(到彼岸)を象徴しているのである。石製円形小皿に多くある《饗宴図》は、単なる饗宴や享乐的な性愛図ではなく、善行を積んだ死者の魂が辿り着く彼岸(果報の世界)で得る快楽を暗示し、即ち果報を得ることを示す因果応報の図像化であるとの解釈が可能である。

飲酒、性愛に耽るだけで安易に到彼岸が叶うとの意味ではない。擬似的で大変卑俗ではあるが、彼岸はあたかもそのような一体感、万能感、多幸福感の満ちた場であるとの、安易で俗かもしれないがそれ故に万人にも理解しやすい図像による黙示なのである。釈尊は相手や状況によって説法の内容を、時にはあたかも正反対のことを述べるかのように自在に変えた。図像も説法のひとつの手段ならば、俗な《饗宴図》などは在家者に対する、一種の釈尊に特徴的な「対機説法」における「譬喩」なのではないだろうか。

(4)「撮取・吸引タイプ」の具体的事例


～出家踰城図における女神テュケー

ガンダーラの仏伝浮彫の出家踰城図に表される城壁冠を被る女性像は、都市の守護女神(nagara-devatā)であり、城壁冠を被るギリシアの都市の守護神テュケーと比定され、出家踰城の地である都市カピラヴァストゥを象徴する機能を有すると従来から解釈されてきた。この説に筆者は反対するものではない。

しかしこのテュケー像には、出家踰城の場所を示す機能だけではなく、より大きな意味が託されているのではないだろうか。特にテュケーの起源の地である西方ギリシア・ヘレニズム世界に於けるこのギリシア女神の属性から視た、仏教美術におけるテュケー像の新解釈を示すことを試みた。

先ずテュケーの表された出家踰城図をその構図と図像から2つのタイプに分類できることを示した。つまり、図像学的に出家踰城図には、2つのタイプを認めることができた(表1)。出家踰城図においてテュケーの

居る位置から右タイプあるいは後述する内容から過去タイプあるいは東タイプ、および同様に、左タイプあるいは未来タイプあるいは西タイプである。

	テュケー 城内外 太子・馬 側面観	テュケー 城内外? 太子・馬 側面観	テュケー 城内外不明瞭 太子・馬 正面観
右タイプ 東タイプ 過去タイプ ラリタヴィスタラ・タイプ 運命・幸福・希望・未来タイプ (19世紀以前)		 図1	 図2
左タイプ 西タイプ 未来タイプ ポリュピオス・タイプ 幸運・運命・幸福・希望・未来タイプ (19世紀以前)	 図3		

(表1)

この認識の上で、タイプごとのテュケー図像の意味を考察した。

右タイプは、仏典『ラリタヴィスタラ』に依拠したその図像化とも言えるもので、テュケーは場面の右端に不服そうなポーズで表される。落胆・悲哀・意気消沈タイプ、見送るタイプとも言えるもので、太子の未来よりも、太子が己の生涯の過去として背後に残し出城したところのカピラヴァストウの行く末を案じている内容である。これはラリタヴィスタラ・タイプ、過去タイプ、あるいは東洋の仏典に依拠しているので東タイプとも呼べよう。

左タイプは右タイプ・東タイプと対照的である。左タイプの女神のポーズは、右タイプ・東タイプの女神が場面右端でいじけて拗ねているのとは異なり、場面の中央つまり太子と馬の進行方向よりもさらに左に堂々と立つ。一般にストウパの周りを右繞することから仏伝場面では場面の右から左に物事が進行するとき、右が過去ならば、左は未来を表す。その左の未来の位置に立ち、出城する太子を迎え見守る図像がこの左タイプである。

さて、出家踰城図のこの女性像が、明らかにギリシア・ヘレニズム文明の城壁冠を被った女神である以上、図像と共にその属性も東漸して仏教の中に取り込まれたと考えるべきである。テュケー図像の理解、あるいはこの女神の権能の理解のためには、テュケーを生み出したヘレニズム時代の理解があらためて必要である。テュケー神の権能・属性は、まさにヘレニズム時代という時代そのものから生まれたものであり、ヘレニズム時代を代表する神格であったからである。

クラシック時代において世界は、ひとつの小さなポリスに限定されており、人々はその集団に限定された生涯を送った。人々の行動・経験とそれに伴う価値観は、所属するポリスという集団を規準とした。ゆえに自分のポリスから出城してそこを永久に立ち去ると謂うことは、選択肢としてあり得ないもの

であった。物語内でのことではあるが、あの冒険好きのオデュッセウスでさえ、自分の故郷に帰ることがトロイ戦争と漂泊航海と「数多くの苦難」の果ての常に換わらぬ目的であった。

しかしアレクサンドロス大王東征の後のヘレニズム時代には、このクラシック時代のポリスに限定された人々の世界観と行動原理が覆された。クラシック時代までの確固たるポリス社会が揺らぎ壊され、その世界は外界に対して広く開かれ、多くのギリシア人が、インドにまで広がった東方の新しいポリスへと、己という個人の運命を試し幸運を求めて出て征った。行動・経験とそれを律する価値観と規準は、集団から個へ転換した。見知らぬ新しい大地は、自分のポリスの外であるどころか、自分の属するギリシア文明圏の外でさえある。ゆえに、違和感、単孤・疎外感、根無し状態への不安感が新しい時代の支配的な雰囲気となった。

この激変、波瀾万丈の世界の拡がりの中で、期待と心配が時代の根本的な精神となった。広大で新奇な世界は目まぐるしく展開する不安定なものとなり、劇的な変化ゆえに未来、明日をも予見できなくなり、運命の転換がしばしば様々な場面で起こった。幸運を得れば富と権力を掌中にし王にさえ成るかもしれないが、その翌日には敵に捕らえられ困窮の身に奴隷に売り飛ばされるかもしれない。人生は不安定で、先の見えない極めて不確実なものとなった。ゆえに誰もが幸運・運命を請い願うそれへの思いに囚われ、女神テュケーへの信仰は非常に高まり、極めて多くのテュケーの像がヘレニズム時代に造られたのである。

テュケー女神は運命を司る権能を持ち、礼拝者を守り幸運をもたらす力を持つものであった。ここに於いて女神テュケーは、万象の行く末を定め司る宇宙の意志の如き存在となる。信仰する者を護り、幸運を授ける神秘的な力を有した女神として崇められた。このようにテュケーはヘレニズム時代の中心的な神格となったのである。

ポリュピオスは以下のように述べる。「当時世界のほぼ全域の支配者であったペルシアがその名さえもが跡形もなく滅亡し、代わって、それまで名も知られていなかったマケドニアが全て(オイクノメ)の支配者になるとは！一体だれがそれを信じたであろう。しかしそれは事実なのだ。テュケーは我々全ての人々の人生への影響が甚大で、全てを変え自らの強大な力を思いもよらないできごとの中に顕示し、マケドニア人をおかつてペルシアが享受した繁栄へともたらしたのである。」

ヘレニズム時代の西方における女神テュケーとは、アケメネス朝ペルシアからアレクサンドロス大王へと時代そのものをも転換させるような「運命の劇的な転換」を司る当代切つての「強大な神」であった。ポリビウ

オスに拠るように、世界を支配するペルシア王を滅ぼし、無名のマケドニア王をして世界を支配させたのは、テュケーの力なのである。

ゆえに出家踰城図においてもテュケーは、「運命の劇的な転換」を司る「強大な神」として表されているのである。女神テュケーが太子をして出城させ、仏陀をして宇宙を支配させたのである。出家踰城図において女神テュケーの図像は、単なる都市カピラヴァストゥの象徴としてあるだけではなく、釈迦の「運命の劇的な転換」を司り、見守り寿ぐ存在として表現されているのである。女神テュケーは、運命の劇的な展開を司る強力なヘレニズム的存在であることを東が理解していたからこそ、出家踰城図において転輪聖王から仏陀へと、釈尊の運命の大転換を寿ぐ存在として描かれたのである。(したがって、この右タイプの出家踰城図は、東漸してきた西方のギリシア・ヘレニズム文明に直接に依拠している図像と女神の属性・内容なので、ポリュピオス・タイプ、幸運・運命の劇的転換タイプ、未来タイプ、あるいは西タイプと呼ぶことができよう。)

このように、謂わば「青い眼」の仏教徒の視覚、つまりギリシア文明を知悉しエーゲ海や地中海の青を反映して、それを通じて見るギリシア系仏教徒の視座が必要なのであることが判明した。

図像が東漸するとは、西側の「伝播力」だけでなく、東側の「吸引力」が大きく作用しているのであり、その能力を高く評価すべきである。その結果、地中海域だけに地中海文明があるのではなく、仏教の中にも領会の上で意味が変容して吸引されていることが判明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

芳賀満、「ガンダーラの出家踰城図における女神テュケーの図像-そのタイプ分類とヘレニズム時代ギリシアの視座からの新解釈」『佛教藝術』、査読有、333号、2014、pp.1-22.

Mitsuru HAGA, "Tyche as a Goddess of Fortune in "the Great Departure (出家踰城)" scene of Life of Buddha", in *Scripta antiqua*.

, 査読有, vol.3. (

),

2013, pp145-151.

〔学会発表〕(計 5 件)

芳賀満、「メソポタミア、西アジア、ギリシア、ヨーロッパ、西洋を相対化する視座-ユーラシア大陸全体からみる-」、京都ギリシア・ローマ美術館講演会、2014年12月21日、京都ギリシア・ローマ美術館(京都府京都市)

芳賀満、「教養教育と海-歴史的存在としての海洋生物」、東北大学大学院生命科学研究科附属浅虫海洋生物学教育研究センター主催、東北海洋生物学教育コンソーシアム企画、第2回東北海洋生物学教育フォーラム「大学教育と海」、2014年12月13日、東北大学大学院生命科学研究科附属浅虫海洋生物学教育研究センター(青森県青森市)

芳賀満、「ローマ詩人ウェルギリウスと《トロイの木馬図》 仏典ラリタヴィスタラと《出家踰城図》-東西の視線の交差」、京都ギリシア・ローマ美術館講演会、2013年12月22日、京都ギリシア・ローマ美術館(京都府京都市)

芳賀満、「東方における海獣スキュラ(Σκυλλα)と運命の女神テュケ(Tυχη)-ヘレニズム時代の表裏を成す二柱の女神」、「ガンダーラ美術に見るギリシア・ローマ文化の受容」研究会、2012年10月14日、龍谷大学(京都府京都市)

芳賀満、「お釈迦様出家場面の女神テュケ-仏教美術の中のギリシアの神々」、京都ギリシアローマ美術館講演会、2012年12月22日、京都ギリシアローマ美術館(京都府京都市)

〔図書〕(計 2 件)

芳賀満、「シュリーマンの魅せられた世界-ギリシア美術の歴史」、天理大学附属天理参考館編『ティリンス遺跡原画-シュリーマンの今日的評価-』、天理大学出版部、2015、pp.10-16.

芳賀満、「海獣スキュラの変容と東漸-ユーラシア大陸におけるギリシア図像の伝播とそのオリエントによる吸引』美術史歴参 百橋明穂先生退職記念献呈論文集、中央公論美術出版社、2013、pp.521-547.

6. 研究組織

(1)研究代表者

芳賀 満 (HAGA, Mitsuru)

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教授

研究者番号：40218384